

高度経済成長期より以前の日本では、一戸建ての家に住み、夫は妻を「家内」と呼び、妻は夫を「宅」と呼ぶ人が多かっただろう。英文の内容が示すとおり、「内」と「外」の区別が人の心から社会の隅々にまで浸透していた。しかし、現代では、内部が完全に仕切られた鉄筋コンクリートのマンションが林立し、個人や個性を尊重する考えから、木造の住宅でも、多くの方は自分の部屋を持っている。建物の構造と精神構造の間の相関関係は薄まっていると言えるだろう。

ただ、建物の構造は変化しその相関関係は薄まったかもしれないが、「内」「外」の精神構造はそのまま残り、より複雑な問題を現代社会に提起していると私は考える。例えば、現代の家庭の内部や人間関係に「内」「外」が持ち込まれたら、どうなるのか。家族が鍵のある部屋で過ごす場合、何が起こるのか。日本には約70万人の引きこもりの人々がいると言われる。自分の部屋に鍵を掛け、家族とも必要最小限の会話しかしない。また、生涯未婚率は男性で23%、女性で14%に達していて、日本の少子高齢化の原因になっている。

私は、現代の日本社会では「内」「外」の区別がより狭くなり、家族＝内から自分＝内へと変質してしまったのではないかと推測する。また、区別の厳格さも変化している。以前は、建物の構造は内外を厳格に区別していた反面、人間関係については緩やかだった。「内」側に入る人が多くいた。しかし、現代では、「内」が狭くなったことに対応して”審査”が厳格になり、「内」に入る人の数が減少してしまった。和辻哲郎氏の当時の人間考察は、現代の日本社会を鋭く分析するための一つの視点であると私は考える。